

「アミらしさ」の維持・強化から「自分らしさ」の確保へ： 台北に移住した原住民族アミと都市カトリック共同体

上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程

日本学術振興会特別研究員 DC2

岡田紅理子

【要旨】

故郷を離れて都市に移住した先住民族が自己のアイデンティティを維持するために多様な方法をとってきた現実、人類学的研究にとどまらず、メディアを媒体として一般にも知られている。「原住民族」と呼ばれる台湾人口の約 2% を占める 16 の先住民族の都市への移住についても同様のことが言われ、本報告が対象とするエスニックグループ「アミ」については例えば以下が参考になる。劉（2002）と巴奈・母路（2003）は都市で開催される文化活動（合同豊年祭）、張（1995）はエスニックグループの代表者で構成される組織（頭目協会）、黄（1996）と楊（2006；2008）は集住地区（社区）を対象として、それぞれが漢族社会におけるエスニック・マイノリティであるアミの「アミらしさ」とアミ同士の結束力の維持・強化に寄与してきた、と指摘する。

本報告に関わる調査でも、アミが複数の団体と関わりながら自らの「アミらしさ」を確認している現状が見られた。しかし、先行研究が対象としてきた活動、組織は日常的にアミに関わるものであるとはいえず、また集住地区に居を構えないアミについては、十分な説明ができていないと言いたい。

台湾北部の新北市に移住したアミが定期的に活動をおこなっている団体としては、同じ村落出身者で構成される「同郷会」、居住する区の原住民族で構成される「発展協進会」、そしてカトリック信者のアミについては「共同体」がある。本報告では、このうち特に日常的にアクセスすることが可能で、行政やカトリック教会から金銭的、人的な援助をほとんど受けず、1968 年の設立以来、「アミらしい」カトリック信仰の深化を図ることを目的としてアミ自身が自主・自律的に運営してきた共同体に注目し、その役割を検討する。現在共同体の主要メンバーとして名を連ねている 40～60 代のアミの都市経験には、差別、偏見、孤立といったネガティブのものから、エスニシティや村落出身を超えた同世代の人びととの連帯、交流による「都市のアミ文化」「都市の原住民族文化」の創出というポジティブなものがある。本報告ではアミの共同体を中心に、また同郷会、発展協進会での活動、親族とのつながりをも踏まえて考察することで、「アミらしさの維持、強化」には一括できない、都市に移住したエスニック・マイノリティの人びとと宗教との関係を理解する手がかりとしたい。

【引用文献】

- 劉秀梅 2002 「台北市における都市原住民の豊年祭：『東湖 C・E 基地原住民文化社区』の事例から」、『人間文化 H&S』第 17 号：107-116 頁。
- 巴奈・母路 2003 「阿美族豊年祭的聖與俗」『社教資料雑誌』292：1-4 頁。
- 張慧端 1995 「由儀式到節慶：阿美族豊年祭的變遷」『國立臺灣大學考古人類學刊』50 期：54-64 頁。
- 黃美英（主編） 1996 『從部落到都市：臺北縣汐止鎮山光社區阿美族遷移史』行政院文化建設委員會。
- 楊士範 2006 『阿美族都市新家園：近五十年的台北縣原住民都市社區打造史研究』唐山。
- 2008 『飄流的部落：近五十年的新店溪畔原住民都市家園社會史』唐山。